

**令和3年度 第2回こまきこども未来館講座運営会議
会議要旨**

日 時	令和4年3月22日（火）午後6時～午後7時15分
場 所	こまきこども未来館 クラブ室（ラピオ3階）
出 席 者	<p>【委員】5名（※敬称略） 玉置崇、長江美津子、植松浩二郎、加藤和昭、森島厚子</p> <p>【事務局】10名 こども未来部長、こども未来部次長、多世代交流プラザ所長、事業推進係長、係員（5名） NPO 法人10人村（受託者）（5名） 【傍聴者】2名</p>
会議資料	<p>次第、資料1（こまきこども未来館体験ひろば2021）、資料2（こまきこども未来館体験ひろばアンケート調査結果）、資料3（体験ひろば令和4年度実施計画）、資料4（体験ひろば平日・土日・夏休み体験内容）、資料5（こまきこども未来館運営会議補足資料）、資料6（講座運営評価シート） ※資料1については委員にのみ配布（傍聴者は閲覧のみ）</p>
会議内容	<p>1 こども未来部長あいさつ</p> <p>2 議事（1） 令和3年度講座等実施報告及び令和4年度講座等実施計画案について</p> <p>議事（2） 講座等の評価について</p>
会議要旨	<p>1 <u>こども未来部長あいさつ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・こまきこども未来館は、今月6日にオープンからちょうど1年が経過した。 ・緊急事態宣言等の度重なる感染拡大防止措置により、臨時休館や厳しい入場制限など、難しい運営を余儀なくされたが、感染対策を徹底しながら、10月からは市外居住者の方の来館をスタートした。 ・現在では、市外や県外から多くの方に来館いただき、オープンから1年間でおよそ16万人以上の方が来館。 ・体験ひろばについても、思うような活動が行えない中、地道に地域の企業や団体などに積極的な声かけを行い、交流・体験キャンプの充実を図ったり、より利用しやすいレイアウトに変更するなど、試行錯誤を重ねながら、利用者のリピートに繋げている。 ・体験ひろばのこれまでの活動報告と、次年度の計画案に対し、それぞれの見地から忌憚のない意見をいただきたい。 <p>2 <u>議事</u></p> <p>（1）令和3年度講座等実施報告及び令和4年度講座等実施計画案について</p> <p><input type="checkbox"/>令和3年度講座等実施報告</p> <p>◎ワークショップ</p> <p>○外部講師によるワークショップ（117回開催・参加者のべ631人） 新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言などの措置により、臨時休館や、開催の中止、参加人数の制限等の影響があったが、多くの子どもたちに参加していただいた。</p>
事務局	

- コミュニケーターワークショップ（参加者のべ5, 000人以上）
工作、iPad を使ったものなど17種類のワークショップを展開したが、人気のあるもの、リピートに繋がりにくいものなどの実績を反映し、来年度以降のメニューを決定する。
- ◎交流・体験 CAMP
 - ・103回開催 出展者のべ127団体
 - ・未来館サポーターの登録 54団体104人
 - ・サポーターには個人や団体、企業など様々な方が登録。
 - ・活動内容も交流・体験 CAMP へのブース出展のみでなく、裏方でのお手伝いや、工作等の材料の提供など様々である。
 - ・秋からは地元で活躍する企業のパートナーシップ登録に力を入れた。
 - ・パートナーシップ企業が繰り返しブース出展するなど、地域との連携をさらに深めることができた。
- ◎こどもの参画
 - ・子どもたちの生の声を把握するために、講座等に参加の際にアンケートの聴取や、館内にポストイットを用意し、「やってみたいこと」「感じたこと」をいつでも掲示できるようにしている。聴取した子どもたちの声は3, 000以上となった。ひとつひとつにしっかり応えていきたい。
 - ・子どもたちの主体的な取組みにつなげるために、令和3年度は2つの実行委員会を設置し、重荷になりすぎない程度の役割を持たせた。
 - ・具体的には、夏休みに人気だった紙相撲大会の表彰式の音楽をアプリで作曲してもらうなどした。
 - ・子どもが主体的に体験ひろばの活動に関わる大事な取組みなので、今後につなげていきたい。
 - ・これまでの講座等で制作した作品等を「こまキッズフェスタ」に合わせて館内展示し、制作者でない子が「こういうのを作ってみたい」「同じ年代の子が作ったと思えないくらいすごい！」など子ども同士で講評しあうなどの姿が見られた。
- ◎利用者アンケート
 - ・保護者、児童347名に実施。
 - ・コミュニケーターがしっかり子どもたちに対応できているか、体験内容を子どもたちが楽しんでいるか、今後のリクエストに絞って実施した。
- 小学生
 - ・楽しかったことについて、コミュニケーターワークショップが多数を占めた。
 - ・コミュニケーターが子どもとしっかり関わりながら実施してきており、アンケート結果には手ごたえを感じている。令和4年度には拡充していきたい。
- 中高生
 - ・楽しかったことについて、小学生と同じくコミュニケーターワークショップが一番多かった。
 - ・中高生にも楽しんでもらえるよう iPad を使用した作曲講座を実施している成果と考えている。
 - ・一方、体験ひろばに「行ったことがない」が56%を占めており、大きな

課題と捉えている。体験ひろば含め、セキュリティゲートの中は小学生の遊び場所だと感じている児童が多いため、中高生でも寄りやすい環境整備や魅力ある施策を実施していく。

○幼児・小学生保護者

- ・楽しかったことについて、「でっかいくるま」、「変な～自由工作」が多かった。工作への興味関心があることがわかった。

○体験してみたいこと

- ・学年が上がるにつれて、「デザイン」「プログラミング」などの関心が高い。
- ・中高生は「動画」「アニメ」「音楽」の関心が高い。
- ・対象年齢のニーズとして参考にする。

□令和4年度講座等実施計画案

- ・市外居住者も含め多くの方が来館する土日休日は、短い時間で多くの体験がしたいというニーズがある。一方、平日は近隣の児童が主であり、何度か体験したコンテンツには飽きているので、また来たい、また体験したいという強い動機付けが必要であるなど、曜日によってもニーズが異なるため、いつ来館しても楽しめる事業計画とした。
- ・新たに実施する事業などを含め、少しずつアップデートし、改善できるところを改善した。

◎ワークショップ

- ・子どもたちのニーズに合わせてデジタルワークショップの拡充を行う。
- ・一回ではなく、複数回必要となるよう課題設定型のワークショップの展開。
- ・継続的に子どもたちが関われるよう複数回の連続講座の実施。
- ・中高生対象とした上級講座の実施や幼児親子の居場所づくりなど幅広い年齢層に対応する。
- ・いつ来ても誰でも楽しめる内容とした。

◎交流・体験 CAMP

- ・パートナーシップ企業の登録増を目指す。
- ・こども未来大学の拠点のひとつとしてSDGsに関連した講座の実施。

◎こどもの参画

- ・主体的に未来館に関わっていく「こども CAMP」の実施
- ・近隣高校等の部活動とも連携し、小学生に対し体験活動を提供。

◎新事業

○こまき少年少女発明クラブ

- ・令和4年度より発足のため現在申請中。
- ・年間継続した活動（全13回）によりアイデアを形にしていく。
- ・創作活動と合わせて、様々な道具の使い方も教えていく。

◎広報活動等

- ・講座運営会議、サポーターワークショップ、アンケート等により幅広く意見聴取し運営に反映していく。
- ・施設に来られなくても講座に触れられるよう講座内容の配信などを企画。
- ・他の施設との連携事業の実施。

加藤委員	<p><質疑応答等> 市外居住者の割合は、全体のどのくらい来館しているのか。</p>
事務局	<p>現在、新型コロナウイルス感染対策として、定員を設けて入場制限を実施しているため、土日休日について、市外居住者は予約制とし、定員の5割程度を事前抽選にて受け付けている。土日休日は市外居住者の方は有料となることもあり、実際の市外居住者の来館割合としては、全体の2割～3割程度である。平日については、予約の必要もなく、無料でご利用いただけるため、未就学児親子が主な利用者であるが、市外居住者の来館割合は全体の5割程度となっている。</p>
加藤委員	<p>様々なジャンルの講座がたくさんあるが、案内周知・申込みがウェブ中心では、小中学生への周知は難しいのではないかと。4月当初にある程度の年間講座計画表が小中学生全員に配られると、興味のある講座を見つけやすく、申し込みやすいのではないかと。</p>
事務局	<p>意見を参考に配布を検討します</p>
森島委員	<p>特に小学生を対象に企画していると思うが、学校の代休や天候などに大きく左右されるため、来館者の動きが読めないこともあり、対応が難しいのは理解している。</p> <p>最近ではまん延防止重点措置や各校でも感染者が発生するなどの影響もあり、外出を控える児童が多かったが、3月の卒業式は、卒業生以外は自宅学習ということもあって、小学生の来館者がすごく多かった。</p> <p>しかし、主対象の小学生が午前中から多く来館したにも関わらず、ドローンがお休みなど十分に対応できていなかった印象である。体験ひろばの魅力を広めるチャンスであるので、来館者の状況に応じて柔軟に対応できるといい。ドローンについては、動かすことは楽しいが、報告にあったように数回体験したら興味がなくなることもある。ドローンに搭載のカメラ映像の活用するなど発展性があるといい。</p>
事務局	<p>意見を受け止め対応を検討する。</p>
植松委員	<p>来館者を楽しませたいという受託者の献身的な努力が見えるが、コロナ禍で十分に活動できていないと思うので、急いで結果を求めず、引き続きじっくりと</p> <p>100人を越えるサポーターは財産である。大切にしまっと多くの方を巻き込んでほしい。</p> <p>体験ひろばの活動は広く集めるのも大事だが、深く学ぶことも大切。加藤委員の意見と同じくジュニアセミナーのように講座一覧を周知できると、参加できなくても活動を知るきっかけになる。</p>
長江委員	<p>アンケートの結果を見ると、講座の内容や活動に魅力があるということが良くわかるが、小中学生の講座については比較的、楽しい企画を考えやすく、</p>

	<p>成果も見えやすい。一方、乳幼児保護者アンケートには、「でっかいくるま」や「ダンボールのおうち」が楽しかったと回答されているが、体験ひろばで実施している乳幼児対象の講座や活動を考えると、そもそもの選択肢が少ないため、この2つに集中したのではないか。乳幼児期の親子の触れ合いは大事であるので、乳幼児親子向けの講座も充実してもらえるといい。</p>
<p>玉置委員</p>	<p>アンケート回答の中に「死ぬほど楽しい」というのがある。短い言葉だが子どもにここまで言わせるのはすごいと思う。</p> <p>コミュニケーターのいる施設は全国的にも少ない。未来リテラシーを育むという意識をもってどのように児童に声かけをしているかが大切。数回遊んだら飽きてしまい、新しい遊びがないと寄り付かないというのも、遊びから学びにするための声かけがコミュニケーターからあれば、解決できるのではないか。ただの遊びを高いレベルに導くような声かけを意識した研修を充実してもらえるといい。</p>
<p>事務局</p>	<p>「コミュニケーター」とは玉置委員の言われるとおりの役割だと考えているが、開館から1年目は、コミュニケーターも利用者も初対面であり、様々なワークショップを“体験してもらう”ことで精一杯であった。2年目からは子どもたちとの関係をじっくり深めて、一緒に楽しむ・一緒に考えるという、課題を共有して一緒にカタチにしていくという、一步踏み込んだ活動を心がけていきたい。</p>
<p>森島委員</p>	<p>交流・体験 CAMP を企業や団体が行っているが、「〇〇をあげるから体験しない？」や企業の紹介・勧誘が強いところがある。今一度、児童館の中で活動する意味を考えて活動してもらうよう周知してほしい。</p>
<p>事務局</p>	<p>承知した。</p>
<p>長江委員</p>	<p>魅力ある講座や体験を展開していると思うが、また来たくなるためには、遊びが続いていくことも大切。子どもは遊びが続いていくことで資質や能力が高められていく。そのためにも、玉置委員も言われたように、ただ褒めるだけでなく、自ら課題に気づくような質の高い声かけを期待するが、どのように考えているか。</p>
<p>事務局</p>	<p>体験の際に子どもたちに声をかけると、工夫したところや頑張ったところなどを一生懸命説明してくれるが、課題に気づかせたり、次につなげるような質の高い声かけには足りていないコミュニケーターもいる。来年度からは外部の研修にも積極的に参加し、子どもとの関わり方について、基礎的な研修から実施していきたい。</p>
<p>植松委員</p>	<p>開館2年目は、より子どもとの関わりを深めていくとの事ですので、積極的に子どもの参画を意識するといいいのではないか。少年少女発明クラブについては、10年20年先を見据えた息の長いビジョンをもって小牧市らしい発明クラブにしてほしい。</p>

森島委員	<p>10 人村さんは、企業や団体と連携して事業を実施するなど地域連携の強みを感じている。一方、未来館の児童厚生員は、来館者との関わりを重視してきた。開館 1 年目はお互いそれぞれの業務に精一杯でうまく連携が図れなかった面もある。開館 2 年目を迎えるにあたって、お互いの良さや強みを生かしてオールこども未来館で、スタッフが同じ気持ちで元気に笑顔で声かけできるよう一緒に頑張っていけるといい。</p>
玉置委員	<p>ノウハウを発明できるんだ どんな声かけをしてもらってうれしかったか どんな声かけをもらったからこれができた 中身がみえると 見えてくる 価値づけ どれだけ価値づけするかで子供の意欲を生む こどもがやっていることをかつ付けするとさらに次に 個別最適な学び 自分で自分の課題を作り出す コースがあって 子供の意見を聞いて 運営していく 未来り寺井 s-を育む</p>
事務局	<p><u>議事（2）講座等の評価について</u> 厚生労働省の児童館ガイドラインにおける、児童館が大切にすべき視点などを参考に、講座等開催業務委託の仕様書に掲げる「あそび」「まなび」「交流」という 3 つの柱を基に、講座運営に特化した評価シートを作成した。 エビデンスについては、別途あげていく</p>
加藤委員	<p>評価項目にある「保護者同士の交流環境づくり」について、今年度の報告では読み取れなかったが、具体的にどんな活動があったのか。また、この評価項目について、どのような意図で設けているのか。</p>
事務局	<p>父母クラブ活動などの活動は行っておらず、現状、保護者同士の交流を積極的に設けてはいないが、親子講座の中で保護者同士の交流は見られる。 市としては、小学生以上の活動は、保護者が積極的に関わるのではなく、児童の主体的な活動を促していきたいと考えているので、対象としては未就学の幼児親子。児童館ガイドラインに、児童館では子育ての悩みや喜びをわかちあう機会が大切とあるため、保護者同士の交流につながるような幼児親子向け活動の充実を期待して評価項目にあげている。</p> <p style="text-align: center;">[議事についてはすべて承認]</p>

